



(愛称は「ちがさき丸ごと博物館」)

秋の芸術散歩 ゆかりの画伯たち



▲小山敬三「茅ヶ崎風景」1934（昭和9）年

茅ヶ崎には多くの画家たちがいます。今回はこれまでに茅ヶ崎に住まれて物故者となられたなかから著名な画伯たちを紹介します。

画家たちは茅ヶ崎の素晴らしい風光の中に身を置くことによって作風が大きく変化したり、影響を受けたりしたといわれています。なかでも萬鐵五郎画伯は特に大きく影響を受けたといわれています。

また、ここに取り上げた画伯たちの作品展が過去茅ヶ崎市美術館で開催されています。

（掲載作品所蔵・写真提供は、すべて茅ヶ崎市美術館）

都市資源
コラム

茅ヶ崎市名誉市民・

小山敬三画伯について

小山敬三画伯は1897（明治30）年、長野県小諸生まれ。1987（昭和62）年、茅ヶ崎にて89歳で死去。

1932（昭和7）年、浜降祭を描いた「海浜祭日」は市民文化会館の緞帳（どんちょう）の原図となっています。1916（大正5）年、茅ヶ崎に製糸工場「純水館」を設立したのは、父・久左衛門正友氏。

南湖にあった小山家の別荘は母親の喘息のために建てられたもの。画伯は別荘で、画家になることを反対する父と三日三晩話し合ったといわれています。

茅ヶ崎のアトリエはフランス留学から帰国後、1929（昭和4）年、別荘内に建設されました。このアトリエから代表作「白鷺城（姫路城）シリーズ」など数々の名作が生まれています。

1975年文化勲章受章。1976年茅ヶ崎市の名誉市民に。

長野県小諸市に小山敬三美術館があります。

（参考文献：「生誕110年記念“気韻生動”の画家 小山敬三展」 2007（平成19）年）



▲若き日の画伯。ご夫人と。

三橋兄弟治（いとじ）画伯

三橋兄弟治画伯は1911（明治44）年に茅ヶ崎に生まれました。

茅ヶ崎尋常高等小学校高等科を卒業後、神奈川県師範学校に入学し、在学中の18歳の時に第6回槐樹社展に入選。画家として、そして教育者として活躍。茅ヶ崎美術クラブ（現・茅ヶ崎美術家協会）の創立者として、茅ヶ崎市の美術文化発展にも力を注ぎました。

スペインを中心とした欧州旅行を幾度も重ね、多くの風景画を残しました。

1996（平成8）年、85歳で死去。

茅ヶ崎市美術館にはご遺族から市に寄贈された約100点の作品が収蔵されています。

また、生誕100年の年に、ご遺族から市に寄贈された「バルデロブレスの古城」は茅ヶ崎市民文化会館大ホール・ホワイエに展示されています。

（参考文献：「凛凛たる表現・爽爽たる詩情—美を求めて60年 三橋兄弟治の世界展」

1990（平成2）年）



▲三橋兄弟治「自画像」1937（昭和12）年



▲速水御舟「花の傍 花子」1932（昭和7）年

速水御舟（はやみぎょしゅう）画伯

速水御舟画伯は1894（明治27）年、東京浅草に生まれ、1935（昭和10）年、腸チフスにより東京で死去。40歳の短い生涯でした。

この間に数々の名作を生み出しており、昭和期の美術品として最初に国の重要文化財に指定された「銘樹散椿（めいじゅちりつばき）」や「炎舞（えんぶ）」は特に有名です。

1916（大正5）年、画伯22歳の時、実姉の療養先であった茅ヶ崎を訪れます。その後、死去するまで父親が南湖に建てた別荘にたびたび訪れて、海岸風景などのスケッチも残しています。

氷室椿庭園の旧持ち主であった氷室花子さんをモデルに描いたと言われる作品「花の傍」も有名です。速水画伯が亡くなる1年前の1934（昭和9）年、茅ヶ崎で詠んだ短歌“茅ヶ崎の渚による夜光虫手にすくいなば 消えてはかなし”は画伯の短い生涯を暗示するかのようです。

茅ヶ崎市美術館では、「花の傍 花子」を所蔵しています。

昔、小山敬三画伯と速水御舟画伯はサザンビーチあたりで出会ったことがあるかもしれませんね。

（参考文献：「企画展 速水御舟展—茅ヶ崎と御舟—」 2010（平成22）年）

萬鐵五郎（よろずてつごろう）画伯

萬鐵五郎画伯は、1885（明治18）年、岩手県に生まれました。

18歳頃から日本画を描き始め、1902（明治35）年、東京美術学校西洋画科入学。卒業制作は「裸体美人」。

茅ヶ崎へは1919（大正8）年、仕事による過労のためのノイローゼで、父に転地療養を勧められ引っ越してきました（現在の南湖）。茅ヶ崎に弟が住んでいたためです。心身共に癒えた後は、それまでの水墨画、南画に代わり水彩画に精力的に取り組みました。画伯にとって茅ヶ崎は“桑畑と陽光に輝く海辺”だったようです。



▲萬鐵五郎「海岸風景」1926（大正15）年

「湘南風景」などに描かれているように、桑の木の背後に松がある風景を好んで描きました。茅ヶ崎の自宅の周辺は桑畑に囲まれていましたが、故郷の土沢も同じだったようです。

「小屋のある風景」は、魚を干した棚の並ぶ漁村の砂浜らしい風景が描かれています。そこには明るい真昼の太陽の輝きを感じられます。

「高麗山の見える砂丘」「夕日の砂丘」など、水彩画法の特色を存分に活かし、水墨画とは異なった色彩の開放感があり、それは湘南の陽光を通しての画伯自身の精神の開放を示しているかのような喜びを感じさせ、他に類を見ない水彩画を完成させました。

写真は「海岸風景」。1927（昭和2）年、足かけ8年の茅ヶ崎生活をして、この地に永眠しました

（参考文献：「歿後八〇年 萬鐵五郎～東京／土沢／茅ヶ崎～」 2007（平成19）年）

茅ヶ崎の郷土食（第2回）

今回は、茅ヶ崎の「行事食」について調べてみました。10月から12月頃の「行事食」をご紹介します。

「食」は村の年中行事と深く関連しています。農作業で忙しい毎日のなか、茅ヶ崎では行事のときに自分たちの楽しみを含めて、ご馳走をいただいていたそうです。北部でよく食べられる行事食です。

【10月・十三夜】

お団子とススキや女郎花（オミナエシ）を縁側に供えます。その他に、丸いお盆の上に四角い絹豆腐と白いご飯を供えます。ほかにも満月にちなんで「丸い果物や野菜」（たとえば、梨・リンゴ・柿・里芋・さつまいも・栗など）を丸いお盆にのせて供えます。この日は、子どもが他所の家のお供えを貰いに来ます（暗黙の了解があるので、この日は子どもが他所の家のお供え物を黙って持って行ってもよいことになっています）。9月の十五夜にも同様のことを行います。

【10月～11月の収穫の時】

収穫が終わった家では、農家ごとにそれぞれ「かりあげ」だからといって、赤飯・煮しめを神棚へ供えて豊作を感謝します。

【11月23日：勤労感謝の日（新嘗祭 にいなめさい・にいなめのまつり）】

今年とれた新米を持ち寄ってお餅つきをして振る舞います。3俵ほど作ります（1俵＝60kg）。

【12月30日：いちもん飾り】

お正月を迎える前に、お飾りを家、井戸、物置、蔵、お墓などに飾ります。



▲満月にちなんで「丸いもの」をお供えします。写真は十五夜に民俗資料館（旧和田家住宅）でお供えしたときの様子。

「ふるさとちがさき」を再発見する67日間のキャンペーン・ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展「つながるちがさき」を、今年度も開催します。

今年度は、10月16日（水）から12月21日（土）まで、まち歩きやスタンプラリー、さまざまな都市資源を生かしたイベントなどを通して、茅ヶ崎の「秋」を市民のみなさんに実感していただきたいと考えています。ちがさき丸ごと博物館アクションプロジェクトで鋭意準備を進めています。

昨年度、参加された市民のみなさまからは「茅ヶ崎を歩く機会ができてよかった」「知らなかった場所を発見することができて楽しかった」「行く先で親切にしてもらえてうれしかった」といったご感想をいただきました。

企画展を楽しんでいただくためのツールとして、昨年度ご好評をいただいた企画展ガイドブック「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館手帖」の今年度版も発行します。

「知る」「発見する」「交流する」「つながる」がキーワード。ぜひお楽しみに！



（略称：ちがさき丸ごと博物館の会）の活動

■行事報告

浜風とともに湘南海岸を歩こう（小和田公民館との協働事業）

7月12日（金）好天のなか、小和田公民館～なぎさギャラリー～海岸～開高健記念館を巡りました。

■行事予定

①ウォーキングと郷土の歴史再発見（老人福祉センターとの協働事業）

10月11日（金）茅ヶ崎駅発着、開高記念館や高砂緑地を巡るウォーキングガイドが開催されます。

②丸ごと博物館まち歩き 「ちがさきの大山道を歩く」

11月16日（土）藤沢四ツ谷から鶴が台団地付近まで「ちがさきの大山道」をご案内します。

③丸ごと博物館まち歩き 「高砂緑地から海へ～南湖周辺の文化人を訪ねて～」

12月7日（土）昨年に引き続き、高砂緑地、国木田独歩追憶碑、茅ヶ崎館、南湖院跡、茅ヶ崎ゆかりの文化人旧宅跡などをご案内します。

※②③のまち歩き企画は、10月18日（金）から募集開始です。お問い合わせは社会教育課まで。



ちがさき丸ごとふるさと発見博物館って何？

茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材など、「このまち」らしさをもついろいろな事柄を幅広く選び出し、これらを都市資源と呼ぶことにしました。これらの都市資源を調査・研究し、それぞれがもっている意味や魅力を広く市民に周知する一方、それぞれを関連付けて散策や各種イベントなどで活用を図ることにより、茅ヶ崎を改めて知り、茅ヶ崎を愛する心を育み、ひいてはまち全体の活性化を図ろうとするものです。そして、都市資源は地域のかげがえのない宝物として、地域により保護され育てられていくことになります。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視しています。

編集後記

今回は茅ヶ崎市美術館のご協力で、茅ヶ崎ゆかりの画伯について特集することができました。現代の画家たちも活躍されているので、次回以降取材をしていきたいと考えています。人材は茅ヶ崎の素晴らしい都市資源ですね。